

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 20 日現在

機関番号：16102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780417

研究課題名(和文) ネットいじめの予防に関する包括的研究

研究課題名(英文) Cyberbullying among Japanese junior and senior high school students

研究代表者

小倉 正義 (OGURA, MASAYOSHI)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：50508520

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中高生のネットいじめの実態と予防の検討を行った。研究Ⅰでは、中学生を対象に質問紙調査を行った。中学生1,675名のデータ分析の結果、半年間でのネットいじめの被害者あるいは加害者は約3%であった。また、ネットいじめの被害生徒が、自分に原因を求めがちであり、他の人にあまり話さない傾向があることも示された。研究Ⅱでは、大学生106名、大学院生59名を対象に質問紙調査を行い、高校生当時、被害者あるいは加害者としてとしてネットいじめに関わったものが約6%であることが示された。また研究Ⅲでは、教員養成系の大学生・大学院生を対象にネットいじめへの対応の講義を行い、講義の内容について検討した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine cyberbullying among Japanese junior and senior high school students in order to identify preventive measures for cyberbullying. In Study I, the subjects were 1,675 Japanese junior high school students. In the total sample, about 3% were cyberbullies or cybervictims during a period of 6 months. Findings revealed that cybervictims tended to think that they were the cause of the bullying and avoided speaking about the bullying. In Study II, the subjects were 106 college students and 59 graduate students. In the total sample, about 6% reported that they were cyberbullies or cybervictims in their high school days. In Study III, we conducted a lecture on providing support for cyberbullying for students of a teacher training course and examined the contents of the lecture.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：いじめ インターネット利用 予防教育

1. 研究開始当初の背景

現代の青少年は、インターネット環境を通して、他者とコミュニケーションを盛んに形成している。今後は、インターネット環境が、われわれの生活にとってますます重要となることは明白であり、青少年の行動やメンタルヘルスにどのような影響を及ぼしているのかを早急に検討する必要がある。

インターネット使用に関して社会的問題となっているものの1つに、インターネットを介したいじめがある。パソコンや携帯電話で誹謗中傷やいやなことをされたというネットいじめの認知件数は高校生で20%、中学生で8%と報告されており(文部科学省, 2008)、学校場面でみられるいじめ同様、ネットいじめは中学生・高校生(以下、中高生)のメンタルヘルスの悪化に結びつきやすいと考えられる。そのため、中高生のネットいじめの実態について検討することは急務であるといえる。それと同時に、ネットいじめに対応できる教員の養成も教務であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、中高生のネットいじめの実態を明らかにするために、研究 1 では中学生を対象に行った質問紙調査の結果を分析し、中学生のネットいじめと援助要請行動などとの関連を検討した。研究 2 では、大学生・大学院生に高校生当時のことを尋ねた質問紙調査を実施し、その結果について分析した。また、これらの調査結果を参考にしながら、教員養成系の大学生がネットいじめに対応することのできる力をつけるための授業の検討を行った。

3. 研究の方法

(1) 研究

研究協力者

A 県の中学校 17 校の中学 2 年生 2010 名を対象に質問紙を配布し、有効回答が得られた 1675 名(女 874 名, 男 801 名)を分析対象とした。

手続き

各校でクラスごとに担任から質問紙を配布してもらい、集団式で実施した。大規模質問紙調査であり、匿名性を保つために研究協力者一人一人の署名はもらっていないが、研究の目的や生じる不利益、研究協力の自由について書面にて説明し、同意する者のみ質問紙に回答してもらった。また、回答を提出する時に一人一人封入して提出できるように配慮した。なお、本質問紙調査は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科の倫理委員会の承認を得ていた。

質問紙の内容

ネットいじめの定義を示したうえで、以下

の質問に回答してもらった。質問項目については、Sourander et al. (2010) を参考に作成した。

・ネットいじめの頻度

ここ半年間のネットいじめ体験、ネットいじめられ体験の頻度について、「まったくない」「週 1 回以下」「週 1 回以上」「ほとんど毎日」で回答してもらった。

・ネットいじめの内容

「無視された」、「軽蔑された」、「ののしられた」、「うわさを流された」、「おどされた」、「メールが大量に送られてきた」、「ひどくからかわれた」、「冷やかされた」、「安全をおびやかされた」のそれぞれの方法でどのくらいネットいじめを受けたかについて、「まったくない」「週 1 回以下」「週 1 回以上」「ほとんど毎日」の 4 件法で回答してもらった。

・その他

いじめを受けたと回答している者を対象に、「あなたに何か自分に原因があって、いじめられていると感じますか?」、「あなたをいじめる人に何か原因があっていじめられていると感じますか?」、「インターネット上であなたに向けられたおどしが、学校内(または家、インターネット外のどこか)で実行されることをあなたは恐れていますか?」の質問に「あてはまらない」「多少あてはまる」「あてはまる」の 3 件法で回答を求めた。また、「ネットいじめから助けてもらうために、誰かに自分がネットいじめを受けたことを話したことがありますか?」という質問に、「はい」「いいえ」で回答してもらった。

(2) 研究

研究協力者

大学生及び大学院生に講義終了後に質問紙を配布し、回答が得られた大学生 106 名及び大学院生 59 名のうち 161 名を分析対象とした。

手続き

講義終了後に集団式で実施したため、匿名性を保つために研究協力者一人一人の署名はもらっていないが、研究の目的や生じる不利益、研究協力の自由について書面にて説明し、同意する者のみ質問紙に回答してもらった。また、回答を提出する時に一人一人封入して提出できるように配慮した。

質問紙の内容

・ネット上で受けた行為

研究 1 のネットいじめの内容と同様の項目を用いたが、研究 2 ではあえてネットいじめという言葉を用いなかった。また、研究 1 の結果をふまえて内容を検討し、項目を一部変更した。具体的には、「無視された」、「仲間はずれにされた」、「悪口を書かれた」、「うわさを流された」、「おどされた」、「からかわれた」、「冷やかされた」、「なりすましメールが送られてきた」、「メールが大量に送られて

きた」のそれぞれの項目について、高校生時代に携帯電話(スマートフォンを含む)やパソコンを使ってインターネットを利用している際に、以下のような内容をどのくらい友人からうけたかについて、「まったくない」「週1回以下」「週1回以上」「ほとんど毎日」の4件法で回答してもらった。

・ネットいじめの頻度

ネットいじめの定義を示したうえで、「高校生の時に、あなたはどのくらいインターネット上でいじめを受けましたか?」、「高校生の時に、あなたはどのくらい他の人をインターネット上でいじめましたか?」という質問に対して、「まったくない」「週1回以下」「週1回以上」「ほとんど毎日」の4件法で回答してもらった。

(3)研究

先行研究や本研究の研究、研究の結果をもとに、鳴門教育大学の大学生及び大学院生を対象とした講義「生徒指導論」、大学院生を対象とした「子ども理解と生徒指導」の中で、ネットいじめを含むいじめへの対応をどのように扱うかについて検討した。

4. 研究成果

(1)研究

ネットいじめの頻度

ここ半年くらいの間でネットいじめに関わった生徒は全体で3.2%、内訳をみると、ネットいじめのみの経験があったのは1.2%(女子1.4%、男子1.0%)、ネットいじめられのみの経験があったのが1.3%(女子1.6%、男子1.0%)、両方経験があったのは0.7%(女子0.5%、男子1.0%)であった。

ネットいじめの内容

ネットいじめの内容についての結果は、表2の通りであった。表2の上段はそれぞれの内容のネットいじめを受けた人数、下段は割合をパーセンテージで示したものである。結果から、「うわさを流された」「メールが大量に送られてきた」「ひどくからかわれた」などの内容が比較的多いことがうかがわれた。性別×いじめの内容のクロス集計表を作成し、²検定を行った結果、「おどされた」では10%水準で有意な結果(女子<男子)が得られた。

その他の質問への回答

その他の質問への回答の割合を出した結果、いじめの原因が自分にあると思っているものが、半数以上いることが明らかにされた。また、いじめの側には理由がなく、いじめられた自分だけに理由があると答えたものも約23%いることが示された。また、37%(無回答を除けば56%)の生徒が、インターネット上でおどされたことが実行されることについて恐れを抱いていることがわかった。さらに、ネットいじめられ経験のみがあった者

は、50%(無回答を除けば64.7%)の生徒がいじめられたことについて誰にも話していないことが明らかになった。

研究の考察

ネットいじめの頻度に関して、本研究のネットいじめに関わった生徒の数値は先行研究(内海,2010など)と比較して低い数値となっていた。この理由として、本研究では、「いじめ」という言葉を使用して尋ねたことや、「ここ半年間くらい」と時期を限定して尋ねたことが影響していると思われる。また、ネットいじめを受けた生徒がいじめられた生徒にしばしばみられるように、自分に原因を求めがちであり、他の人にあまり話さないことも示された。ネットいじめが一般的ないじめよりもさらに大人から見えにくいであろうことから、ネットいじめを予防や早期発見のための方策のさらなる検討が求められる。

表1. ネットいじめ、ネットいじめられ経験について

	性別		合計
	女子	男子	
ネットいじめられ経験	14	8	22
%	1.60	1.00	1.31
ネットいじめ経験	12	8	20
%	1.37	1.00	1.19
両方経験	4	8	12
%	0.46	1.00	0.72
有効回答生徒数	874	801	1675

表2. ネットいじめの内容

	性別		計
	女子	男子	
無視された	6	9	15
	0.71	1.16	0.92
軽(けい)蔑(べつ)された	9	7	16
	1.07	0.90	0.99
ののしられた	7	7	14
	0.83	0.90	0.86
うわさを流された	8	13	21
	0.95	1.67	1.29
おどされた	4	10	14
	0.47	1.28	0.86
メールが大量に送られてきた	9	16	25
	1.07	2.05	1.54
ひどくからかわれた	10	12	22
	1.19	1.54	1.36
冷やかされた	4	8	12
	0.47	1.03	0.74
安全をおびやかされた	4	5	9
	0.47	0.64	0.55
有効回答生徒数	843	779	1622

(2)研究2

ネット上で受けた行為

大学生・大学院生が高校時代にネット上で受けた行為についての結果は、表3の通りであった。表3の数値は、それぞれの項目の行為を受けた割合をパーセンテージで示したものである。結果から、「うわさを流された」、「からかわれた」、「なりすましメールを送られた」が10%を超えており、比較的多いことが明らかになった。

ネットいじめの頻度

大学生・大学院生が高校時代にネットいじめに関わった生徒は全体で6.2%、内訳をみると、ネットいじめのみの経験があったのは、1.2%、ネットいじめられのみの経験があったのは3.1%、両方経験があったのは1.2%であった。

研究の考察

大学生・大学院生に高校時代を回想してもらったものであるため、解釈には注意が必要であるが、一定の割合でネットいじめを受けたものがあることが示唆された。

また、「ネット上で受けた行為」では、あえてネットいじめという言葉を使わずに質問したが、その結果、それぞれの行為を高校時代に受けた学生が5.0~15.5%と1割程度いることが示唆された。ネットいじめを受けたと回答しているものが3.1%であることを考えると、全体的に高い数値であることがうかがわれる。

このような行為はいじめにつながりうる行為であることを考えると、いじめの実態を把握するためには、直接的に「いじめ」という言葉を用いない調査の必要性もあるのではないと思われる。今後、学校でのいじめの実態把握のための調査にも活かすことができよう。今後、高等学校と連携して、実態把握のための調査と予防のための方策について検討を行っていききたい。

表3. 高校時代にネット上で受けた行為(%)

無視された	9.9
仲間はずれにされた	6.8
悪口を書かれた	8.7
うわさを流された	13.7
おどされた	5.0
からかわれた	15.5
冷やかされた	9.3
なりすましメールを送られた	11.2
メールが大量に送られた	9.9

(3) 研究

講義全体の中での位置づけ

「生徒指導論」「カウンセリング論」の限られた時間の中で、生徒指導提要(文部科学省, 2010)に示された内容を網羅する必要がある。いじめへの対応に関しては、この講義の中だけで学ぶわけではないが、「生徒指導論」の中で、ある程度「いじめへの対応」について学ぶことができるように工夫し、教職経験を有する大学教員と臨床心理学専門の大学教員が同じタイトルで1コマずつ講義を行うようにした。

講義内容について

研究代表者が担当する授業では、いじめへの対応に役立つエッセンスを含むように意識している。また、いじめへの対応全般に加

え、子どもたちとインターネット利用に関する内容、ネットいじめの内容など様々な側面から講義を行っている。

また、いじめへの対応を考える際に、下記のような架空事例を用い、いじめへの対応について考える力をつけるように工夫している。

以下のような架空事例である。

『教室で一人仕事をしていると、ある一人の生徒が教室に入ってきました。おどおどした様子で周囲に誰かいないかがっている様子でした。「どうしたの?」と尋ねると、少し迷ったようでしたが、「僕いじめられているんですけど...」とその生徒はいいました。その目は何かを訴えかけるように感じられましたが、それ以上は言葉が続かないようでした』

この場面を示した上で、一つ目の課題として、「この生徒に対して、あなたはどのように声をかけるか。具体的に教えてください」と学生に問う。この問いに回答してもらったうえで、次の場面を呈示する。

『その生徒はいじめの内容についてぼつりぼつりと話し始めましたが、ふっと我に返ったように「やっぱりいいです。たいしたことないんで。今言ったこと忘れてください。他の先生には言わないでくださいね」と言って、教室を出て行ってしまいました。』

この場面を示した上で、二つ目の課題として、「この後、どのようにあなたは行動するか」と学生に問う。この問いかけはいじめ全般に関するものであるが、ネットいじめにも応用可能だと考えている。実際に、学生の回答をみていると、様々な反応がある。どのような対応が望ましいかではなく、自分で具体的な対応を考える点に意味がある。大人数の講義であるので、十分に深めることはできていないが、考えるきっかけを与えることはできているのではないかと考えている。今後、ネットいじめへの対応に特化したバージョンも作成し、さらに洗練した内容にしたい。また、この方法でどのような学びがあったかを尋ねるなど、効果の測定を今後の課題とする。

(4) まとめと今後の課題

本研究では、研究で中学生のネットいじめの実態の検討、研究で高校生のネットいじめの様子を検討、研究でネットいじめを含むいじめへの対応を考えるとのできる教員を養成するための講義内容の検討を行った。これらの研究をもとにして、ネットいじめを予防のための方策について、中学校・高等学校、さらには小学校の現場とともに検討していききたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

和田秀美・小倉正義，小中移行期における児童の学校適応感に関する研究：中学校生活への期待感・不安感に注目して，教育実践学論集，査読有，2016，17，pp39-50.

幸田有史，華園力，小倉正義，発達障害で二次障害を負った子への支援：EMDR の役割：日本 EMDR 学会第 9 回学術大会におけるシンポジウムを振りかえって，EMDR 研究，査読無，2015，7，pp3-15.

森裕子，福元理英，岡田香織，小倉正義・畠垣智恵，野邑健二，学習支援を通じた学習困難児の心理的变化の検討 - 児童・保護者・担任教師による評価を通して - ，学校心理学研究，査読有，2015，14，pp45-57.

小倉正義 新しいメディアと子どもたち，子どもの心と学校臨床，査読無，2014，9，pp122-131.

〔学会発表〕(計6件)

和田秀美，小倉正義，小中移行期の学校適応感における心理的变化のプロセス - 縦断的なインタビュー調査に基づいた仮説モデルの生成 - ，日本心理臨床学会第 34 回秋季大会，2015 年 9 月 20 日，神戸国際会議場(兵庫県神戸市).

小倉正義，和田秀美，中学校生活に関する期待感について - 小学 6 年生を対象とした質問紙調査から - ，2014 年 11 月 9 日，日本教育心理学会第 56 回総会，神戸国際会議場(兵庫県神戸市).

山脇彩，小倉正義，濱田祥子，本城秀次，金子一史，中学生における不適切なネット使用と援助希求性との関連，2014 年 8 月 24 日，日本心理臨床学会第 33 回秋季大会，パシフィコ横浜(神奈川県横浜市).

小倉正義，濱田祥子，金子一史，本城秀次，中学生のネットいじめの実態，第 54 回日本児童青年精神医学会総会，2013 年 10 月 12 日，札幌コンベンションセンター(北海道札幌市).

辰己亮，小倉正義 いじめ被害体験から外傷後成長に向かうプロセスに関する研究日本心理臨床学会第 32 回大会，2013 年 8 月 27 日，パシフィコ横浜(神奈川県横浜市).

Shoko Hamada, Masyoshi Ogura, Aya Yamawaki, Shuji Honjo, Andre Sourrander, Hitoshi Kaneko, Bullying and self-cutting among Japanese adolescents. 15th International Congress of European Society for Child and Adolescent Psychiatry, 2013 年 7 月 7 日, The Convention Centre Dublin(Dublin, Ireland).

〔図書〕(計2件)

小倉正義他(本城秀次・野邑健二・岡田俊編)，臨床児童精神医学，西村書店，発行年未定.

小倉正義他(後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮編)，新青年心理学ハンドブック，福村出版，2014 年，726 ページ(644).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小倉正義 (OGURA, Masayoshi)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：50508520